東京福祉大学・大学院紀要 第12巻 第1-2合併号（Bulletin of Tokyo University and Graduate School of Social Welfare） pp55-65（2022, 3）

「台湾日日新報」にみるタイと台湾の日本語普及に関する交流
― 国立台湾図書館での検索から ―

山口雅代

東京福祉大学 教育学部（名古屋キャンパス）
〒460-0002 愛知県名古屋市中区丸の内2-16-29

（2021年11月1日受付、2022年1月20日受理）

抄録：国立台湾図書館にある「台湾日日新報」の中からタイと台湾の日本語普及に関する17の記事を抜き出した。その記事を「台湾からタイへ」「タイから台湾へ」に分け、またそれぞれ内容ごとに3つに分けた。その結果、タイと台湾の間には日本語普及に関する交流があったことがわかった。「台湾からタイへ」では、バンコク日本語学校の学習者が日本に視察に行った帰りに台湾に立ち寄っていたこと、台湾総督府からバンコク日本語学校に教科書が送られていたこと、「タイから台湾へ」では、タイからの留学生がバンコク日本語学校で学んだ後、台湾で日本語教育を受けていたこと、バンコク日本語学校で学んだ学習者が日本に留学する途中で台湾に寄っていたことなどがわかった。これまでのタイの日本語教育史研究においては、日本とタイの二国間のみで考えられていた。しかし、今後のタイの日本語教育史研究には、台湾を見据えた研究が必要であると考える。
（別刷請求先：山口雅代）

キーワード： 国立台湾図書館、台湾日日新報、台湾総督府、バンコク日本語学校

緒言

1. はじめに

2013年のチェンマイの調査において日本語学校学習者の聞き取りから日系企業で働く台湾人にも日本語を習ったとの証言を得、さらにその台湾人はタイ語も流暢に話せたと述べていた[1)]。チェンマイにおいて、なぜ台湾出身者が日系企業で働き、日本語を教えに来ていたのだろうか。戦前・戦中のタイの日本に関する資料は、吉川（1994）によると、敗戦直後日本軍が後難を恐れて当時の関係文書を日本でも現地でもすべて焼却してしまい、保存されていないと言われている。チェンマイ日本語学校の資料についても現時点で見つかっていない。そこで、2019年7月30日から8月3日まで台湾に資料を探しに出向いた。しかし、チェンマイに関する資料は見つけることができなかったが、タイと台湾間の日本語普及に関する交流の記事を国立台湾図書館にある「台湾日日新報」の中に見出すことができた。先行研究によると、蔡（1996）は、台湾総督府が東南アジアに台湾人を利用して文化工作を推し進めたことについて述べている。玉置（2019）では、タイを重視した台湾総督府は、1940年より、現地商社の人材不足とタイ進出を後押しすることを目的に、台湾人青年を商業（実業）実習生としてバンコクに派遣する事業を始めたことを報告している。「台湾日日新報」には、玉置（2019）が指摘した台湾からタイへの商業（実業）実習生派遣だけでなく、タイから台湾への留学についての記事も見られる。そこで、先行研究と台湾で発行された「台湾日日新報」から、タイと台湾で日本語普及に関連したどのような往来があり、関係があったのか、見ていく。尚、日本語普及は、日本語を普及するための教育や、政策等も含める[2)]ものとする。

2. 先行研究

蔡（1996）は、1943年に台湾総督府が出版したパンフレット『本島人を利用する華僑工作の具体的方案』について東南アジアに台湾人を利用して文化工作を推し進めてきたことについて述べている。その方案は、政治工作、経済工作、文化社会工作、宣伝工作の4つに分けられ、経済工作を除き、すべて文化政策と関連すると述べている。政治工作では、華僑を監視すると同時に懐柔工作を進め、親日感情を持たせることなどを目的に、中等学校以上を卒業した者に南方語等を解し皇民として意志堅固なる者を詮衡し、華僑工作の要員として現地日本側各種機関に配属させ、有力華僑及団体の懐柔等に当たらせることが記されている。文化社会工作の方策では、台湾人に与えた任務として、華僑に日本語を享受し、彼らの間に広くこれを普及させるようしていた。玉置（2019）は、南洋進出の拠点としての

台湾について、タイを取り上げて検証している。南洋が欧米列強の植民地となる中、タイは日本の南進にとって特別な位置づけで、南進が国策となった1930年代後半に台湾人のタイ進出が本格化したこと、タイを重視した台湾総督府は、1940年より、現地商社の人材不足とタイ進出を後押しすることを目的に、台湾人青年を商業（実業）実習生としてバンコクに派遣する事業を始め、1940年第1回14名、1941年第2回15名、1942年第3回20名を派遣、日本商社や台湾籍民の商社で働かせたことなどに言及している。また、玉置以外にも台湾人を東南アジアへ派遣したとする研究は、中村（1980）や卞（2002）などにも見られる。

タイの日本語教育史研究においては、2012年から2019年まで日タイ言語文化研究会が年に1回論文集を発行し、タイと日本における日本語教育史の構築が進んできている。1926年に設立された日本人小学校において1930年代に日本語教育が始まり、1938年12月に日タイ文化研究所バンコク日本語学校が開校した。バンコク日本語学校は、日語文化学校の松宮一也（1938）が外務省文化事業部の委託を受け、星田晋五と高宮太郎と共に1938年11月に「日暹羅文化事業実施並調査報告書」を作成し、設立させた。報告書の中には教科書として『日本語読本』があがっている。しかし、星田と高宮は1939年ごろ喧嘩両成敗として辞め、後任としてタイ大使館武官大佐田村浩から平等通照が派遣されたが、星田は1940年10月後任の平等が来るまでバンコク日本語学校に関わった。北村・ウォラウット（2001）では、星田が1940年5月に第3回暹羅学生旅行団10名の日本国内の見学旅行引率をしていると報告している。この時期、学習者は減っていった。そこで、1941年7月国際学友会から鈴木忍が立て直しのため日本語教師として派遣された。1941年12月8日に日本軍がタイに上陸すると、日本語を学ぶタイ人が増え、1942年9月にバンコク日本語学校2校が開講され、1945年8月に閉鎖されるまで、盛況であった。受入れ側の日本においては、タイからの留学生が増え、1935年12月に国際学友会が設立された。国際学友会についての研究は、河路（2006）が在籍者の名簿を公開するなど詳しい。さらに、河路（2007）は、1942年1月19日付で国際学友会とタイ文部省との間に「泰国学生招致に関する協定」に基づき、1942年度・1943年度にそれぞれ6名（男子4名・女子2名）が来日し、8年程度の長期にわたり日本で教育を受けていることを報告している。

このようにタイの日本語教育史の研究は進んできている。しかしながら、タイと台湾間の日本語普及についての研究は見受けられない。「台湾日日新報」の中には、タイと台湾の交流が多く見られ、タイ人留学生が日本語教育を受けていた記事もある。そこで、「台湾日日新報」の中のタイと台湾の日本語普及に関する記事を抜き出し紹介する。掲載記事は読みやすさを考慮し、なるべく旧字体を新字体にし、読み取れない漢字は○○にし、抜粋する。記事では、泰・泰国とあるが、記事以外ではタイとする。紹介する箇所には下線を引き、注目する箇所には点をつける。

3.「台湾日日新報」のタイと台湾の日本語普及についての交流記事分類について

台湾には、日本統治時代の資料が多く残されている。特に古い資料で南方政策に関する資料は、台湾研究古籍資料庫（中央研究院台湾史研究所）と台中にある国立公共資訊図書館に保管されている。今回紹介するのは、国立台湾図書館の「台湾日日新報」[3]で、キーワードを入力すると検索できる。チェンマイ（清萬）で検索すると、何も出てこなかったが、「泰国」で検索すると、300以上もの記事がヒットした。記事を探すと図1のようにピンでとめられた記事（昭和15（1940）年5月4日（土）朝刊14408号7頁（表1①参照））が出てくる。国立国会図書館でもマイクロ資料や縮印本が見られるが、タイに関する記事は扱いが小さいものだと、見落としてしまう。検索した300以上の記事の中から、日本語普及に関する記事を抜き出したものが、表1である。これら17の記事を「台湾からタイへ」、「タイから台湾へ」の2つに分け、さらに内容ごと3つに分けた（図2参照）。

「台湾からタイへ」では、台湾からタイへの人・物の移動、また日本からタイに帰国途中に寄った場合も含める。人の移動として「1. 実業実習生」と「2. 日本からタイへの帰国途中での台湾視察」、物の移動として「3. 教科書送付」の

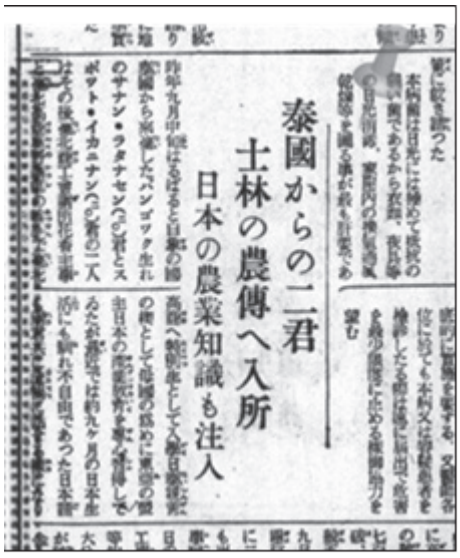
泰國からの二君
土林の農傳へ入所
日本の農業知識も注入

図1. 昭和15年5月4日（土）日刊
（14408号7頁（表1①））

表1.「台湾日日新報」タイに関する記事

No	日付（昭和） 日・夕刊	記事見出し	号数・頁
①	15年5月4日(土)日	泰からの二君　士林の農伝へ入所　日本の農業知識も注入	14408・7
②	15年6月5日(水)夕	戦時下の日本を見て　国力の強大に驚嘆　泰国学生団の観察所感	14450・2
③	15年9月27日(金)日	泰国から我国へ　留学生派遣の希望実現？	14564・7
④	15年12月7日(土)夕	台湾の冬は寒い　「糖試」に泰国留学生二人	14634・2
⑤	16年3月13日(木)日	喜びの夢は故国へ　留学生派遣実現？	14729・3
⑥	16年6月9日(月)日	台湾神社頭で有難い体験　タイ国の若人らの感激説	14816・3
⑦	16年6月9日(月)日	蓬莱丸入港	14816・3
⑧	16年6月14日(土)夕	科学台湾に驚嘆　研究標本を筆記する熱心さ　日タイ語学校生徒一行	14821・2
⑨	16年6月25日(水)夕	日本語読本泰国へ　総督府から五百部発送	14832・2
⑩	16年10月9日(木)日	第二回泰国農業練習生来台	14938・2
⑪	17年6月10日(水)夕	泰国留学生廿名　本年中来台決定　日泰親善に一段と拍車	15180・2
⑫	17年7月4日(土)夕	泰国派遣商業実習生　第三回募集	15204・2
⑬	17年9月16日(水)日	日本へ留学の泰国派遣学生　一行八名寄台	15278・2
⑭	17年9月17日(木)日	憧れの盟主日本へ　友邦タイ国から“留学生”七名	15279・4
⑮	17年10月4日(日)日	第三回泰国派遣商業実習生　第一次合格者発表	15295・3
⑯	18年5月5日(水)日	日本農道の把握へ　台湾で励む泰国留学生	15506・4
⑰	18年5月9日(日)日	泰国産業練習生更に修行続行	15500・3

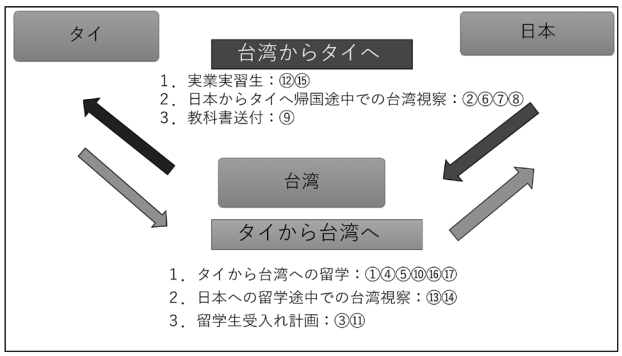

図2. 17の記事の分類と表1の記事番号

3つに分け、それぞれ表1の記事番号を示したのが、以下である。

1. 実業実習生:⑫⑮
2. 日本からタイへ帰国途中での台湾視察:②⑥⑦⑧
3. 教科書送付:⑨

「タイから台湾へ」では、タイから台湾への人の移動で、タイから日本への移動途中に寄った場合を含める。人の移動として「1. タイから台湾への留学」と「2. 日本への留学途中での台湾視察」、日本語教育機関開設などの計画として「3. 留学生受入れ計画」の3つに分け、それぞれ表1の記事番号を示したのが、以下である。

1. タイから台湾への留学:①④⑤⑩⑯⑰
2. 日本への留学途中での台湾視察:⑬⑭
3. 留学生受入れ計画:③⑪

台湾からタイへ

1. 実業実習生

玉置(2019)が示した商業(実業)実習生(以下実業実習生)についての記事が⑫⑮に掲載されている。

⑫17年7月4日「泰国派遣商業実習生　第三回募集」
—略—
昭和十五年以来在盤各商社に実業実習生として年々有為なる本島人青年を派遣し数年間実習の上独立せしめると云う方法に依って一方には現地商社の手不足を補い一面に本島人青年の南方発展に資することとしている、この事業は盤谷大使館の斡旋に依り円滑に実施せられ昭和十五年度第一回実習生十四名十六年度第二回十五名の派遣を見たのであるが何れもその成績は極めて良好で現地に於ても非常に喜ばれ乍ら一同張切って働いている状態である、本年度は更にこの人数は増加され総数二十名が派遣される事となり
—略—

⑮17年 10月4日「第三回泰国派遣商業実習生　第一次合格者発表」
督府外事部では曩に第三回泰国派遣商業実習生を募集した処南進熱を反映、二十名に対し千余名の応募があった
—略—

⑫の記事には、実業実習生派遣について現地商社の人手不足を補い南方発展に資するという目的があり、バンコク大使館の斡旋であったこと、昭和15（1940）年第1回14名、昭和16（1941）年第2回15名派遣され、昭和17（1942）年には第3回20名が派遣されることが記されている。また、⑮の記事から昭和17（1942）年に派遣される20名に対し1,000人以上の応募があったとある。このことから実業実習生派遣は人気が高かったと言える。

2. 日本からタイへ帰国途中での台湾視察

昭和15（1940）年6月、昭和16（1941）年6月にバンコク日本語学校学習者が日本への視察旅行後、タイに帰国する途中で台湾に寄った記事が②⑥⑦⑧にあがっている。日泰文化研究所やバンコック日本語学校と記されているが、現在では日タイ文化研究所バンコク日本語学校と表記するのが一般的である。これらを1940年の視察記事②と、1941年の視察記事⑥⑦⑧に分けて見ていく。

②15年6月5日「戦時下の日本を見て　国力の強大に驚嘆　泰国学生団の観察所感」

泰国学生日本視察団一行十名は日泰文化研究所理事星田信吾氏に引率され約1ヶ月に亙る内地視察をなして帰国の途次四日午前八時基隆入港の西貢丸で寄台した、その一行は親しく見た戦時下日本の力強い姿に驚歎し乍ら左のように視察の感想を語った

―略―

②の記事には、タイ人学習者一行10名が日本での1か月の視察を終え、理事の星田信吾（正しくは晋五）に引率され昭和15（1940）年6月4日（火）8時に西貢丸で台湾基隆に入港したと記されている。1939年にバンコク日本語学校を辞めたとされている星田であるが、その後も理事として残っていたことがわかる。先行研究で北村・ウォラウット（2001）も星田が引率した日本への学生視察について言及していたが、タイへの帰国途中に台湾に寄っていたことは記述していない。

⑥16年6月9日「台湾神社頭で有難い体験　タイ国の若人らの感激説」

―略―

八日、月余に亙る内地観光から帰国の途次を寄台し、聖戦五年、意気益々昂る南方基地台湾の実情を視察して両国親善に貢献戦とする盟邦タイ国の学生さん達がある、サライラ・バンダーランシン君を団長とする日タイ語学学校（在バンコック）の学生十名（男子六名、女子四名）がそれだ、八日午後四時五十五分台北駅に下車旅の疲労も何のその南方協会の職員二名に引率され　―略―

⑦16年6月9日「蓬莱丸入港」

【基隆電話】商船蓬莱丸は八日午後二時基隆岸壁についた

―中略―

日本の文化視察に赴いたバンコック日語学校生徒、ケンチヤノン・ワンダナチンダ君ほか九名の男女学生たちが東京、大阪、名古屋、横浜、京都など内地主要都市の視察を終へさらに帰国の路すがら台湾視察のため同船で寄台、　―中略―

なほ一行は来る十七日基隆出港の西貢丸で帰国する予定である

⑧16年6月14日「科学台湾に驚嘆 研究標本を筆記する熱心さ　日タイ語学校生徒一行」

友邦日本の躍進振りを見学し懐かしの郷土黄衣の国タイへ一路帰国の途にある日タイ語学校生徒はサテイラ・バンダーランシ君を団長として去る八日来台し、南進台湾の逞しい姿を見学のため台中、台南、嘉義方面に赴き十一日再び来北、台北教育会館別館に滞在、十二日は督府外事部並に南方協会を訪れ愉快な旅を了えた感謝の挨拶を述べそれより台湾情緒豊かな大稲埕を散歩、台湾文化の粋を集めた督府博物館を見学した、十三日も午前九時から一行は祖国の留学生として励んでいる督府農業試験所のスポット・イカニナン君を訪ね同試験所を見学、団長のサテイラ君は筆記すると云う熱心振りで農業日本の科学研究に驚嘆　―略―

上記⑥⑦⑧の記事は、昭和16（1941）年6月8日（日）にバンコク日本語学校学習者10名（男子6名、女子4名）が蓬莱丸で台湾基隆に入港し、6月17日（火）に西貢丸でタイに帰国するまでの台湾での視察について記された記事である[4)]。1940年6月に台湾に寄った折には、②の記事でタイから星田に引率されていたが、1941年6月ではタイからの引率がいないようで、⑥⑧の記事からバンコク日本語学校のサライラ・バンダーランシン君が団長で、⑥の記事から台湾着後は南方協会[5)]職員が引率していることが記されている。⑦の記事には、団長以外にケンチヤノン・ワンダナチンダ君という学習者が参加していたことが記されている。⑧の記事で、一行は1941年6月13日（金）9時からタイからの留学生が研修している台湾総督府農業試験所を見学し、スポット・イカニナン君と会っていることが記されている（「タイから台湾へ」「1. タイから台湾への留学」参照）。

3. 教科書送付

1938年11月1日に松宮一也が作成した「日暹文化事業実施並調査報告書」には教科書として『日本語読本』の名前が挙がっている。

⑨16年6月25日「日本語読本泰国へ　総督府から五百部発送」

南方共栄圏の友邦泰国日本事情認識は相当白熱化しているがこれに伴って日本語研究熱は新興泰人を煽り、バンコックにある日泰文化研究所経営の盤谷日本語学校への入学者は最近では俄然増加し入学志願者三百名を突破している状況でこれに対する日本語教材並に日本語国定教科書の不足を来しこの程督府文教局迄日本語教授資料五百部の送付依頼があった、文教局では之を外事部二課に依託したが注文の五百部は近くバンコックに送付される事になった

台湾総督府から『日本語読本』500部が日タイ文化研究所バンコク日本語学校に送られている[6)]。日本語研究熱がタイで高く、バンコク日本語学校の入学者志願者が増加し、300名以上であり、教材が不足しているとしている。昭和16（1941）年12月8日の日本軍上陸以前に既に日本語を学ぶタイ人が増えていたことがうかがえる。

タイから台湾へ

1. タイから台湾への留学

タイから留学生が来台していたことはあまり知られていない。①④⑤⑩⑯⑰の記事ではタイからの留学生が台湾で日本語教育を受けた後、農業練習生として専門機関で研修を受けていることが記されている。これら6つの記事を次の2つに分けて見ていく。第1回農業練習生の①④⑤の記事と、第2回農業練習生の⑩、第2回、3回農業練習生の⑯⑰の記事の2つに分ける。

①15年5月4日「泰からの二君　士林の農伝へ入所　日本の農業知識も注入」

昨年9月中旬はるばると白象の国泰国から来台したバンコック生まれのサナン・ラタナセン（20）君とスポット・イカニナン（20）君の二人はその後、台北商工会議所花香主事と台北高商奥野講師の斡旋で台北高商へ特別生として入学日泰親善の楔として母国の為めに東亜の盟主日本の商業教育を専心習得していたが最近では約九か月の日本生活にも馴れ不自由であった日本語も同君共に流暢に話せる様になり非常な張切方であるが愈々実地訓練の為に士林農業伝習所へ四日から入所し鍬の戦士として汗みどろになり

―略―

④15年12月 7日「台湾の冬は寒い　『糖試』に泰国留学生二人」

熱帯農業技術経営技術を先進国の台湾に学ぶ為友邦泰国から選ばれて二人の留学生が台湾に送られてきた、サナン・ラタナセン（22）スポット・イカニナン（21）両君で二人ともバンコック高等学校の学生でインカニナン君は農業専攻、ラタナセン君は英文学専攻という変り種、昨年九月日泰両国商工会議所の斡旋で台湾に来るとすぐ台北師範付属学校に入学、ここで約四ヶ月間日本語を勉強、それ以来台北市富田町農業試験所で研究生活を続けていたが、ラタナセン君は希望する糖業研究の為この程台南市竹○○の糖業試験所に移り耕種科竹下武雄技師の下で糖業第一科より勉強を始めている、耕種科実験室にラタナセン君を訪ねると国防色の作業服を無造作にひっかけた柔和な感じの青年ははにかみながら

私達の学校でも以前は英、仏、独語が選択語学になっていましたが最近では学校にも日本語科ができたりして迚も日語熱が盛んです、私もこちらに来る前一ヶ月余り日本語を習いましたが英語と違って日本語は仲々六ヶ敷いと思いました、台湾は泰国と似たような気候ですが冬は少し寒くて困ります　―略―

⑤16年3月13日「喜びの夢は故国へ　留学生派遣実現？」

【台南電話】泰仏印紛争は十一日午後四時円満安結を見たが祖国泰の安否を気遣いながら今は糖業研究所に糖業の研究をつづける泰国留学生サナン・ラサナセン（二三）君を農芸化学研究室に訪ねる祖国泰の輝かしい前途と友邦日本の厚誼に感謝の瞳を輝かせながら巧ではあるがあまり難しい日本語の判らぬ同君は村雲技手を通じて喜びを語る　―略―

①の記事から、昭和14（1939）年9月中旬にバンコク出身のサナン・ラタナセン（20）君とスポット・イカニナン（20）君の2名が台湾に留学し、約9か月の台湾での生活を日本の生活としている。④の記事では、サナン・ラタナセン（22）君とスポット・イカニナン（21）君が1939年9月日本とタイ両国の商工会議所の斡旋により台湾に来た後、台北師範付属学校で4か月日本語を学び、農業試験所で研究生活を続け、サナン・ラタナセン君は専門機関である糖業試験所に派遣されていることが記されている。前章⑧の記事（「台湾からタイへ」「2. 日本からタイへ帰国途中での台湾

視察」参照）においてバンコク日本語学校一行10名が、1941年6月13日に農業試験所を見学しスポット・イカニナンに会っていた。1940年12月には、スポット・イカニナン君は農業試験所で研修している。また、④の記事で、サナン・ラタナセン君は、バンコクで1か月日本語を学んでいると述べている。どこで学んだかという記述はないが、バンコク日本語学校設立が、1938年12月であることから、バンコク日本語学校で学んだ可能性が高い。⑤の記事でサナン・ラタナセン君の年齢が23才とある。①の記事で20と記載されているが、この時は21であろう。⑤の記事は、フランスに割譲したタイの失地が日本の仲介により、1941年5月に東京でタイ・フランス平和条約の調印がされ、タイに失地が戻り、3月11日には既に円満に安結されたと記され、その喜びを第1回のサナン・ラタナセン君がインタビューに応じている記事である。あまり難しい日本語はわからないと記されている。

⑩16年10月9日「第二回泰国農業練習生来台」

台湾商工会議所ではタイ日本商工会議所の依頼により一昨年来タイ国農業練習生の指導養成に着手してきたが七日、バタビア丸にて第二回練習生ピニット・シリセン君（二十六歳）が高商鈴木教授と同伴して来台した

同君は中学校四学第年修業後盤谷日本語学校特別科二学期を修了し内務省土木局に勤務して居た者であるが台北では国民学校で日本語を習得の上総督府農業試験所練習生として入所することになって居る

⑯18年5月5日「日本農道の把握へ　台湾で励む泰国留学生」

大東亜共栄圏の一翼として共存共栄の契りも固く結ばれた日泰両国の親善は日増しに強固となり、同盟国として大東亜戦完遂に共同の道を歩んできたが今回更に盟主日本の力強き躍進を手本に泰国産業開発第一線の指導者として第三回産業留学生を派遣、日泰親善、産業開発、通商促進に一段の拍車をかけ前の留学生サナン、ナラタセン君は留学を了え、目下泰国の農業指導者として日本の農業精神を基底とし、新興泰国の興隆に力を尽くしているが今回更に台湾商工会議所に依り第三回練習生としてスッチャイ・イエオーバーツ君（二六）、シニイット・シリーシーン君（二六）を招致、泰国興隆に、農業開発に資せんとして全般協力、躍進日本の力強き錬成の中に孜々として勉学しているが、スッチャイ君及シニット君は昭和十七年九月渡台、第一師範付属第一国民学校に日本語を修了、スッチャイ君は目下台南糖業試験所に入所、甘蔗の育成栽培と製糖業及製糖副産物の研究に邁進している、シニット君は綿作栽培研究に嘉義市農事試験に入所している、スッチャイ君は新興泰国の頼もしき姿を動作に現しつつ流暢なる国語で左の如く語る

泰国では共栄圏の盟主として、日本に対する研究及び日本語は仲々盛んで毎日三時間がこの為に振り当てられている、母国に於ても自分は一生懸命やって来たが未だ未熟である、今回の泰国の留学生として日本に来た喜びも聖戦下に於ける日本の充実振り余裕綽々とした生活を見て日本の国力に対する讃嘆の辞を何に依って表現して良いやら判らない、泰国もピブン首相統裁下に泰国一致して米英撃滅に邁進している、今回第三回の練習生として当地に参り泰国産業の開発に全力を傾注、留学中の成果を遺憾なく発揮共栄圏のために働く心算である

と心強き言葉で述べ、又台南商工会議所本理事は左の如く語る

台湾商工会議所主催としてスッチャイ、シニット両君の渡台を見たが、スッチャイ君は高等学校を三年、更に大学に通ったインテリ青年で此の前途有望な青年たちを日本へ留学させる事に付いては洵に邦家の為に慶賀に堪えない所である、―中略―

今後も産業留学生が更に、第四、第五回として日本農業技術進得に渡台する事になっているが及ばず乍ら全力を尽して日泰親善、泰国産業開発に貢献したい心算である

⑰18年5月9日「泰国産業練習生更に修行続行」

泰国産業練習生として台北市に於て夫々実習を続けていた、ピニット、スッチャイ、クチョートの三君は今回首尾よく実習を習得したので更に希望の学課を先行することとなり台湾商工会議所が当該官衙と交渉の結果、其諒解を得、夫々その箇所に修業を続けることになった、即ちピニット君は農業試験所で一般農業を修得の上今回嘉義農業試験支所に入って綿業の専攻をなし又スッチイ君は台北第一師で国語及び日本の生活状態並に日常の作法を修習、国民学校卒業程度の実力を得更に進んで糖業試験所で糖業を研究、クチョート君は同じく台北第一師で規程の課目を修得し農業試験所で一般農業に関する知識経験を研究することになり目下夫々その場所で懸命に勉学にいそしんでいる

⑩の記事は、台湾商工会議所がタイ日本商工会議所に依頼され、一昨年である昭和14（1939）年からタイ農業練習生の指導養成を行ってきたこと、タイ内務省土木局勤務であった第2回の農業練習生ピニット・シリセン（26）君が

台湾に来る前に、バンコク日本語学校特別科2学期を終え、昭和16（1941）年10月7日に来台し、台北の国民学校で日本語を学んでいることが記されている。山口（2016）は、特別科について日本留学を目指す者や日本留学が決まっている者が学ぶとしている（p.123）。⑯の記事では、サナン、ナラタセン君としているが、第1回留学生のサナン・ラタナセン君と思われる。昭和18（1943）年5月の時点で既にタイに帰国し農業指導者として活躍していることが記され、第3回練習生としてスッチャイ・イエオーバーツ（26）君、シニイット・シリーシーン（26）君2名が昭和17（1942）年9月に来台し、第一師範付属第一国民学校で日本語を学び、その後、それぞれ専門の研究機関に配属されていることが記されている。タイで日本研究や日本語が盛んで、毎日3時間学んだ様子や、台湾に来たことを日本に来たと認識している。また、受け入れ側である台湾商工会議所も日本へ留学させる認識であり、第4・5回もタイから台湾に留学生を受け入れる計画があった。⑰では、第2回のピニット・シリセン（26）君と第3回スッチャイ・イエオーバーツ（26）君、さらにクチョート君が実習を終えたことが記され、それぞれの研究機関に派遣されることが記されている。クチョート君についていつ台湾に来たのかの記述がないが、第3回である可能性が高い（「3. 留学生受け入れ計画」⑪記事参照）。スッチャイ・イエオーバーツ（26）君は台北第一師で、クチョート君も台北第一師で規程の科目を終えた後、農業試験所に派遣されることが記されている。ここでも、留学生も受入れ側も日本への留学という認識であったことが読み取れる。

これら①④⑤⑩⑯⑰の記事から、タイからの留学生として、第1回は1939年9月来台のサナン・ラタナセン君とスポット・イカニナン君の2名、第2回は1941年10月来台のピニット・シリセン君1名、第3回は1942年9月来台のピニット・シリセン君、スッチャイ・イエオーバーツ君で、クチョート君も第3回と考えられるが、いつ来台したか記述がない。しかし、第3回はこれらの3名であろう。

2. 日本への留学途中での台湾視察

⑬⑭は、国際学友会へ留学するタイ人が台湾へ寄った記事である。河路（2007）は1942年の招致タイ留学生を6名としている。その招致タイ留学生が、日本に来る前に台湾に寄っている。

⑬17年9月16日「日本へ留学の泰国派遣学生　一行八名寄台」

国際学友会の招聘を受け日本に留学する盟邦泰国派遣のセイナコン・スクトラクン（十六）君外七名の男女留学生一行は打合せのため帰国する大使館書記官相磯嘉雄氏に伴われ日本への留学途上寄台した

⑭17年9月17日「憧れの盟主日本へ　友邦タイ国から“留学生”七名」

国際学友会の招聘を受け泰国より派遣された盟邦泰国の日本留学生一行七名はバンコック駐在日本大使館書記官相磯嘉雄氏に伴われ日本への留学途次寄台したが相磯書記官は次の如く語る

留学生は男四名女三名でみなバンコック出身です、あちらでは中等程度の学校を卒業した優秀な人物揃いで年齢は十五、六歳程度の元気盛りな真面目な人達ばかりです、一同は東京に行きしっかり勉強するんだと、大変な張切り方です、 ―中略― 、留学期間は男子七年女子四年で今の処どの学校に入学するか決定して居ません

又一行の年長者であるピソムダムロン・ナハスバスチさん（二三）は東京駐在泰国大使館員某氏の夫人で

―略―

⑬の記事ではセイナコン・スクトラクン（16）君外7名の男女留学生一行とし、⑭でも日本留学生一行7名となっている。一名はタイ大使館員夫人であるピソムダムロン・ナハスバスチ（23）さんである。この1名を除くと河路（2007）が述べたように6名である。セイナコン・スクトラクン（16）君は、河路（2006）の名簿ではティナーコン（Thinakon Suktrakun）となっており（p.481）、河路（2007）では15才とし、進学先として福岡高等学校をあげ、1944年7月30日福岡の海岸で事故死した（p.80）ことを報告している。

3. 留学生受入れ計画

台湾での留学生受入れ計画についての記事が③と⑪にあがっているので、見ていく。

③15年9月27日「泰国から我国へ　留学生派遣の希望実現？」

新興泰国より友邦日本へ青少年の留学生を是非派遣したいと云う事を最近同国文部省より日本商工会議所へ依頼して来ている、この留学生派遣は日泰親善の一助そして計画されたもので新興の意気に燃える白象の国の青少年に我が日本の優秀なる産業技術を修得させ将来の泰国産業戦士として活躍させようと云うものである、同国側の計画としては盤谷日本商工会議所並に日本文化研究所の斡旋で毎年四、五十名の留学生を日本内地に派遣農業、工業、

商業等の技術並び実務を約三ヶ年に亙って修得させ様と云うもので台湾にも派遣される様である、同留学生派遣に就いて台北商工会議所花香書記長は次の様に語った

日泰文化、経済提携として新興泰国の留学生派遣を日本に依頼して来たので当方でも大に尽力するつもりでいるこの留学生派遣は昨年九月以来台北の農業試験所で農業実習をやっているスポット・インカニサン並にサナン・ラタナーセンの両君の成績良好なのに顧みて計画された様に思える台湾は台湾としての方法で行く積りだ、在留期間は三年ぐらいであるが人員は十名位になるだろう、然し将来は二十名位にしたいと思っている、身体強健、意思堅固な泰国中学校三年以上の学力を有する二十歳前後の泰国青年が来る、勿論日本語を教えなければならぬし寄宿舎も設け在る程度日本的指導を行う考えである、 ―略―

⑪17年6月10日「泰国留学生廿名　本年中来台決定　日泰親善に一段と拍車」

東亜の盟主日本への憧憬を抱いて潮路はるばる支那泰国からの留学生は既に商議所の斡旋で二名の来台を見ているが、督府外事部では日泰親善、文化提携の見地から東亜の指導国として先進日本の文化技術の共栄圏進出に当たり之が尖兵ともなるべき留学生の誘致について豫て折衝中の所、同国に於ける日泰文化協会の斡旋に依り督府の経費負担で新に三名の留学生が来台することに決定、引続き本年度内には本島に男女合せて二十名の泰国留学生を見る事になった、之等は専門学校各種試験所等に本島の熱帯的特殊事情に基く糖業農業等各種研究に専念することになっているが既に厦門から督府に対する小学校教員、警察官の教養依託、広東省留学生の派遣等友邦中国からの留学生来台と相俟って文化を通して共栄圏内の親善強化に一段の拍車をかけるものとして多大な期待がかけられて居り督府外事部では今後に於ける之等留学生の増加趨勢に鑑み学寮設備の計画を進めている。

上記③の記事では、バンコク商工会議所や日タイ文化研究所が日本に毎年、4、50名留学生を送っている[7]ように、台湾にも派遣しようという動きがあり、寄宿舎も設けようとしていた記事である。第1回のタイからの留学生であるスポット・インカニサン君とサナン・ラタナセン君が優秀であることから、昭和15（1940）年時点で10名の受け入れの施設整備の計画があったことが記され、将来的に20名の受け入れ計画があったことがわかる。⑪の記事で日タイ文化協会斡旋により台湾総督府の経費負担で3名の留学生が決定とある。これは、第3回の留学生を指したものと思われる。「タイから台湾への留学」でみた⑰の記事では、クチャート君がどのような経緯で台湾に来たのかわからなかったが、この⑪の記事の中に昭和17（1942）年6月に3名の留学生が来台することに決定とあることから、スッチャイ君とシニリット君とクチャート君3名が第3回のタイからの留学生であると考えられる。さらに、20名のタイから留学生を受け入れることになったことが記されている。③の記事では、1940年からタイ人留学生10名の台湾への受け入れが計画されていたが、⑪の記事では10名の来台についての記述がないことから、1942年6月時点で施設整備は実現されていないと言える。

考察・結論

1. 考察・結論

「台湾日日新報」の記事の中からタイと台湾の日本語普及に関連した17の記事を、「台湾からタイへ」「タイから台湾へ」の2つに分け、さらにそれを内容ごとに3つに分けて見てきた。その結果、多くのことが読み取れた。

「台湾からタイへ」では、「実業実習生」「日本からタイへ帰国途中での台湾視察」「教科書送付」の3つに分けた。「実業実習生」では、1940年に14名、1941年に15名がタイに派遣され、さらに1942年に20名の派遣に対し、1,000名の応募があったことから、その人気の高さが読み取れた。「日本からタイへ帰国途中での台湾視察」では、1940年6月と1941年6月にバンコク日本語学校学習者が日本への視察後に台湾視察を行い、1940年の視察では星田晋五に引率されて台湾視察を行っていたこと、1941年の視察では、タイからの留学生が研修している農業試験所を見学し、タイ人留学生に会っていたことがわかった。「教科書送付」では、1941年6月時点でバンコク日本語学校への入学者が多く、教材が不足したため、台湾総督府がバンコク日本語学校へ『日本語読本』を500部送っていた。

「タイから台湾へ」では、「タイから台湾への留学」「日本への留学途中での台湾視察」「留学生受入れ計画」に分けた。「タイから台湾への留学」では、タイから農業練習生として第1回1939年に2名、第2回1941年に1名、第3回1942年に3名が台湾総督府の経費で留学していた。タイからの留学生は、台湾で日本語教育を受けた後、専門機関で研修を受けていた。さらに、第4回、第5回も留学生を受け入れる計画であったこと、留学生も受入れ側も台湾への留学は日本への留学だと認識していたことがわかった。「日本への留学途中での台湾視察」では、招致タイ留学生が国際学友会に留学する前に台湾を視察していたことがわかった。「留学生受入れ計画」では、タイからの留学生を将来的に

20名に増やし、日本語教育を行うことや、留学生のための設備を整備する計画があったことが読み取れた。

これらのことから、タイの日本語教育史にとって以下の点で台湾との交流を示すことができたと言える。まず、バンコク日本語学校と台湾の関係については、1940年6月と1941年6月にバンコク日本語学校学習者が日本での視察後に台湾に寄っていたこと、台湾総督府からバンコク日本語学校に教科書が送られていたこと、第2回1941年のタイから台湾に留学した農業練習生が来台前にバンコク日本語学校で日本語教育を受けていたことである。タイと台湾における日本語教育については、タイ人留学生である農業練習生が台湾で日本語教育を受けていたことである。このように「台湾日日新報」から、タイと台湾の日本語普及に関する交流があったことが読み取れた。これまでのタイの日本語教育史研究においては、日本とタイの二国間のみで考えられていた。しかし、今後のタイの日本語教育史研究は、地理的にもタイと日本の間にある、台湾を見据えた研究や南洋全体を含んだ研究も必要であると考える。

2. おわりに

本稿は、国立台湾図書館の検索を用い、「台湾日日新報」からタイと台湾の日本語普及に関する記事を抜き出し、タイと台湾において日本語普及に関する交流があったことに言及した。しかし、「台湾日日新報」の記事の紹介になってしまったことは否めない。ただ、タイの日本語教育史を考える上で台湾を見据えた研究が必要であることの提言になったとは思う。今後は、これらのさらなる検証が必要であろう。

チェンマイ日本語学校学習者の述べていた台湾人に関しては、蔡(1996)にあったように、台湾総督府が推し進めた文化工作として台湾人を東南アジアに派遣したと考えられるが、それ以上の詳しい情報やチェンマイに関する資料を得ることはできなかった。当初の目的であった、チェンマイ日本語学校の資料については、台湾研究古籍資料庫(中央研究院台湾史研究所)や台中にある国立公共資訊図書館にある可能性もあり、課題として今後はこの2つの機関に残されている資料を調査しなければならないと考えている。

附記

本稿は、2020年11月29日(日)の日本語教育学会秋季大会での発表「戦時下の日本語普及におけるタイと台湾の関係―『台湾日日新報』を中心に―」に加筆・修正したものです。尚、台湾出張は科学研究費19K13240の助成を受け行いました。

注

1) 詳しくは、山口(2016)を参照のこと。
2) 山口(2016)は、日本語普及の具体的な実施手段である日本語教育を下位に位置づけている。
3) 「台湾日日新報」は、1898年6月から1944年3月まで刊行され、台湾の日本統治期において最大規模の新聞であった(丸善雄松堂学術情報ソリューション事業部(2019))。
4) 省略した記事の中には、台湾での視察が細かく記述されており、それを表にしたのが以下である(表2)。
5) 台湾南方協会は、1939年11月に設立された(台湾日日新報(1941))。
6) 2013年10月にバンコクに行った際、タイ王国元日本留学生協会で戦後日本語を学んだ会員から当時使用した教科書『日本語読本』を見せてもらった。その奥付には「中華民国59年4月1日再販」とあった(写真1、2とも2013年10月筆者撮影)。1970年に台湾で印刷された『日本語読本』がタイ王国元日本留学生協会で使われていた。

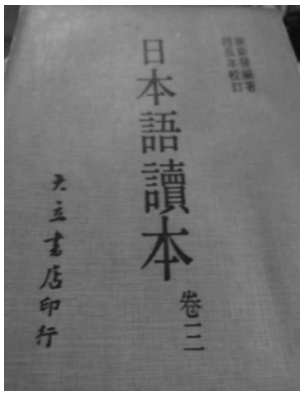

写真1. 『日本語読本』表紙

写真2. 『日本語読本』奥付

表2. 1941年台湾視察

月日(曜日)	視察	宿泊
6/8(日)	14:00蓬莱丸基隆着、16:55台北駅着南方協会職員2名引率され台湾神社、18:00教員会館着	教員会館
6/9(月)	9:30台北駅南下、台中下車、芭蕉検査所、農事試験所、台中公園見学	台中
6/10(火)	台南神社、糖業試験所、安平、孔子廟、	?
6/11(水)	嘉義農業試験所、営林所製作所見学して同夜帰北	教員会館
6/12(木)	南方協会、大稲埕を散歩、督府博物館見学	
6/13(金)～	9:00督府農業試験所にスポット・イカニナン君を訪問、台北帝大、工業学校見学	
6/17(火)	基隆から西貢丸でタイに帰国	

7）河路（2003）はタイからの留学生を受け入れるために国際学友会が設立されたとし、タイ人留学生について詳しく記している。

文献

卞鳳奎（2002）：二十世紀前半タイ国における台湾籍民の活動．南島史学 **60**，19-35.

蔡史君（1996）：日本の南進における文化工作と華僑政策―「台湾本島人利用論」を兼ねて―．重点領域研究総合的地域研究成果報告書シリーズ：総合的地域研究の手法確立：世界と地域の共存パラダイムを求めて **27**，京都大学，57-74.

河路由佳（2003）：国際学友会の成立と在日タイ人留学生－1932-1945の日タイ関係とその日本における留学生教育への反映－．一橋論叢 **129**（**3**），一橋大学，301-313.

河路由佳（2006）：非漢字圏留学生のための日本語学校の誕生．港の人，神奈川.

河路由佳（2007）：立体的理解を可能にするオーラル資料と文字資料の併用 ―1942年度・1943年度のタイ国招致学生事業における在日タイ国留学生に関する調査研究の事例から―．日本オーラル・ヒストリー研究 **3**，75-97.

北村武士・ウォラウット・チラソンバット（2001）：昭和13年の日本－タイ文化研究所日本語学校設立について―星田晋五の仕事を中心に―．バンコック日本語センター紀要 **4**，国際交流基金バンコックセンター，137-145.

丸善雄松堂学術情報ソリューション事業部（2019）：台湾日日新報．http://kw.maruzen.co.jp/ln/bn/12-2019-918.pdf（2021年11月22日検索）.

松宮一也（1938）：日暹文化事業実施並調査報告書．アジア歴史資料館，RefB04011324800.

中村孝志（1980）：「台湾籍民」をめぐる諸問題．東南アジア研究 **18**（**3**），66-89.

台湾日日新報（1941）：南方協会再出発へ　設立後一年余の輝かしき使命　全役員一応．総辞職．1941.10.9.夕刊，14938号1.

玉置充子（2019）：台湾人の東南アジア進出の歴史的展開―1930～1940年代のタイを中心に―．拓殖大学台湾研究 **3**，27-53.

山口雅代（2016）：戦前・戦中のタイにおける日本語普及と諜報工作．大空社，東京.

山口雅代（2020）：戦時下の日本語普及におけるタイと台湾の関係 ―「台湾日日新報」を中心に―．日本語教育学会秋季大会.

吉川利治（1994）：泰緬鉄道．同文館，東京.

Exchange on the spread of Japanese between Thailand and Taiwan in "Taiwan Nichinichi Shinpo": From a search at the National Taiwan Library

Masayo YAMAGUCHI

School of Education, Tokyo University and Graduate School of Social Welfare (Nagoya Campus),
2-16-29, Marunouchi, Naka-ku, Nagoya City, Aichi 460-0002

Abstract : Seventeen (17) articles on the spread of Japanese in Thailand and Taiwan were extracted from the "Taiwan Nichinichi Shinpo" in the National Taiwan Library. The articles were divided two groups: "From Taiwan to Thailand" and "From Thailand to Taiwan". Each group was divided into three parts based on content. Exchanges between Thailand and Taiwan regarding the spread of Japanese language were found as a result. In "From Taiwan to Thailand", students of the Bangkok Japanese Language School stopped by Taiwan on the way back from visiting Japan. Further, textbooks were sent from the Governor-General of Taiwan to the Bangkok Japanese Language School. In "From Thailand to Taiwan", international students from Thailand received Japanese language education in Taiwan after studying at the Bangkok Japanese Language School. We also learned that a student who studied at the Bangkok Japanese Language School stopped by Taiwan while studying abroad in Japan. To date, only exchange between Japan and Thailand has been considered in the history of Japanese language education. However, future research on the history of Japanese language education in Thailand will require research with an eye on Taiwan.
（Reprint request should be sent to Masayo Yamaguchi）

Key words : National Taiwan Library, Taiwan Nichinichi Shinpo, Governor-General of Taiwan, the Bangkok Japanese Language School